# 目　次

瀬戸内海域沿岸第二周辺〈すこしく奥まった地帯〉調査の意義
……井　上　博　文… 3

瀬戸内の一島嶼における生活語彙と環境 ……室　山　敏　昭…49
——環境言語学の一つの試み——

中国山地域方言の動態～『瀬戸内海言語図巻』との比較から～
……町　　博　光…67

小豆島を中心とした内海東部域の方言の動態 …佐　藤　虎　男…80

『瀬戸内海言語図巻』の老年層追跡調査報告……友　定　賢　治…125
——岡山県笠岡諸島における——

芸予諸島域方言の動態　大崎上島・下蒲刈島3地点調査にみる
基本的変容傾向と方言受容の地域差……灰　谷　謙　二…146

関門域の方言——『下関市北九州市言語地図』に読む—— ……岡　野　信　子…160

社会学的にみた瀬戸内海域——社会的性格を中心に——
……八　木　佐　市…193

瀬戸内地方の気候地名と風位名に関する環境地理学的考察
……福　岡　義　隆…209

瀬戸内海圏 環境言語学志向……藤　原　与　一…241

あとがき ……室山敏昭・藤原与一…255

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| うらやましい [225] | φ | φ | ケナルイ・ケナリー・ | φ | φ | ウラヤマシー* |
| くすぐったい [226] | φ | コショバイ$^{2}$ | コソバイ* | φ | クスグッタイ | コソバイ*・コショバイ |
| 常に [227] | ツネニ | イッデモ$^{2}$・ジョージ | イツモ・イッツモ* | φ | イツデモ$^{2}$・イッデモ | イツモ・イッツモ* |
| たびたび [228] | イツモ・イッツモ・イツデモ | ナンベンモ$^{3}$・イッシク$^{2}$・イッシキ・イッシュク・チョコチョコ | タビタビ・サイサイ | イツモ・イッツモイッツモ | サイサイ$^{2}$・イッデモ・イッシュク・イッショク・ナンドモ | タビタビ・ナンベンモ |
| たくさん [229$_1$、229$_2$] 229$_2$] | タント | ヨーケ$^{2}$・ジョーサン | ギョーサン* | φ | タクサン$^{4}$・タント$^{2}$・ジョーサン | ギョーサン・ヨーケ・ヨーサン |
| 自然に [230] | ヒトリダイニ・シゼンニ | φ | ヒトリデニ*・カッテニ | φ | φ | カッテニ*・ヒトリデニ・シゼンニ |
| 突然に [231] | ニワカニ$^{2}$・トツゼンニ | フイニ$^{2}$ | キューニ* | ニワカニ$^{3}$・トツゼンニ$^{2}$ | フイニ$^{5}$ | キューニ* |
| むりやりに [232] | ムリヤリニ・ムリムリニ・ムリトニ | ムリヤリ | ムリニ* | ムリムリニ$^{2}$ | ムリヤリ | ムリニ* |
| やっと [233] | トード$^{2}$・ヨーヤット$^{2}$・マンマト | φ | ヤット | ヨーヨー・トードー | トートー | ヤット |
| やっぱり [234] | ヤッパシ$^{5}$ | φ | ヤッパリ* | φ | φ | ヤッパリ*・ヤッパシ |
| あんじょう [235$_1$、235$_2$] | φ | アンバイ$^{5}$・アンジョイ$^{2}$・エーニ | アンジョー* | φ | アンジョイ・チャント$^{3}$・アンバイ$^{3}$・アンバエ | アンジョー |
| いくつ [236] | φ | ドンダケ$^{2}$ | ナンボ*・イクツ | ドンダケ | ドエダケ・△$^{6}$ | ナンボ・イクツ |

### 3—2　大阪域の傾向

「大阪域事象対照表」では、大阪域を一体としてあつかっているが、現実には和泉・河内・摂津の対立が見られる。また α・β 域ともに南部は和歌山へ、北部は兵庫へとかよう分布傾向が見られる。地理の近接を考えれば当然のことである。老年層の兵庫との接境域を見ると、大阪 β 域と兵庫 αβ 域との間でつながる事象がある（大阪 α 域と兵庫 αβ 域とつながる事象も存する）。例えば、大阪 β 域の「～ガン」（十円ほど [25]）は大阪 α 域にはないが、兵庫 αβ 域に繋がる。さらに、大阪 β 域の「イカ」（凧 [199]）は、兵庫・岡山・四国香川 αβ 域、γ 域では瀬戸内海東半（淡路島にはない）に分布する。この大阪域周辺の方言事象の伝播のさまを示している。大阪 α 域の新事象がまだ及ばずに古い事象を残存させる。老年層では大阪域と兵庫東部域とで事象の異なりがよく見られる。しかし、少年層になると一致することが普通になる。

老年層を見ると、概して β 域の方が α 域に比べて古い事象を残している。少年層を見ると、逆に β 域の方が新しい事象を見せ、かえって α 域が古い事象を残している。老年層と少年層とを見比べると、少年層での方言事象の衰退と「標準語」形の増加が顕著である。しかし、少年層でも老年層の事象を受容している。その場合は、概して老年層 αβ 域で共有する事象が多く含まれる。



老年層 α 域の、例えば「ジカタ」（本土 [122]）・「ヤエシオ」（潮が満ちきって流れのとまった状態 [126]）・「イナサ（東南風 [128]）のように、大阪 β 域には分布せずに、かえって海上の γ 域に通う事象が存する。ここに沿岸域での瀬戸内海域とかよう傾向性を知る。

## Ⅳ.「海」に関わる項目の比較

沿岸部の α 域と β 域の二つの地帯の相違は海への近接の度合いの差にある。この地理上の違いは、海に関する自然現象の有無とともに、漁をはじめ、その生活において海といかに関わるのかという点での異なりを含む。この違いが言語事象にどのように影響しているのか。

調査項目のうち「海」（そして漁と）に関連する、「本土 [122]、暗礁 [124]、渦 [125]、潮が満ちきって流れのとまった状態 [126]、東南風 [128]、東北風 [129]、にわか雨 [134]、船首 [160]、船尾 [161]、漁夫 [162]」の 8 項目を取り上げる。これを見ると、α 域と β 域とで、「相違の認められるもの」と「顕著な相違の認められないもの」の二つに見分けることができる。

顕著な相違の認められないものは、渦 [125] と漁夫 [162] である。渦 [125] は二つの地域とも「ウズ」と「ウズマキ」が分布し差異はない。漁夫 [162] も二つの地域ともに主として「リョーシ類」である。また α 域で「リョード（リュード）」は山口県西部から九州東部沿岸域に分布するが、β 域では、ほとんど山口県西部に狭まり、九州東部沿岸域では一地点のみになっている。α 域の「オキロ、アミヒキ、リョーガタ、オキュード、サカナトリ、ツリンボサン」（以上一地点の分布）は、β 域には見られず、「ハマビト」が一事象のみ加わる。